さわやかさん

元日に行なわれる瓶岩マラソン（瓶岩体育会主催）。今回で２８回目と、多くのランナーに親しまれる大会になりました。

１５８人のランナーのなかに、最年長（６９歳）の岩原さん、女子で一番チビッコの麻由美ちゃん（久礼田小六年生）の姿がありました。

西本麻由美ちゃん・成合

もうすぐ、校内マラソンが始まるので、お父さんが走ってみたらとすすめてくれました。

一緒にお兄ちゃんの優くんも走ったよ。

学校やお家では、駆けっこなんかはするけれど、マラソンは初めて。

途中で疲れてきて、早くゴールしたいなと考えながら走りました。でも、ゴールした後はとても気持がよかったです。

本を読むのも好きだけど、お父さんみたいにスポーツも大好き。

大きくなってもマラソンを続けたいな。

岩原松兄さん・白木谷

二十年来の、マラソンファンです。浦戸湾マラソンには第１回目から参加していますが、元旦早々のこのレースは気分が乗ります。

南国市の百走会に所属して、毎週日曜日の練習は欠かしたことがありません。

走った後のそう快感がすばらしい。しかし、年齢もいきましたし、練習もオーバーにならないよう気を付けています。

今日は、大晦日に飲み過ぎたせいか、去年のタイムより１分以上多くかかってしまいました。

戦後の解放運動・教育・行政がどのように行われたか ③

福祉教員のあゆみ

同和教育シリーズ

戦後の民主教育からも切りすてられようとしている長期欠席・不就学対策の専任として制度化された福祉教員たちは、毎日の家庭訪問で「長期欠席は、親たちの無理解と本人の怠惰からだ」といってきた世間の人たちの考えは事実ではなく、本当は家庭のきびしい貧困が原因であることを痛いほど知らされました。そして、この貧困がすべて「部落差別の結果である」ことに気づいていきました。

長欠・不就学を解消した先人の一人、谷内照義先生は「今日まで不就学の問題が取り上げられなかったのは、同和問題が教育の課題として取り上げられなかったためであり、また、青少年の非行化問題と不就学問題との関係に気づかなかったならば、今日でもあえて顧みられなかったかも知れない。

公平にいって世間の部落に対するあなどりや排斥の感情と敬遠的な態度が、こうした不就学問題を発生させた根本的な原因である」と述べています。

福祉教員たちは、このような現実を背景に問題解決のため、組織的な取り組みをはじめました。一九五〇（昭和二五）年度、福祉教員が制度化された年の五月には同志たちが相より、高知県福祉教育協議会という組織をつくり、十二月には研究会、事例発表会を開くなど、積極的な活動を開始しました。

そして、徐々にではありますが、部落問題が認識され、四部会の中に「同和教育部会」が設置されたことは、今日でも高く評価されています。

こうした福祉教員の活動により、学校現場の実態が明らかになるに従って、この現実を重視した高知県教育委員会は、翌昭和二六年度福祉教員制度に続いて、これも全国ではじめての同和教育専任三事（谷内照義氏）を置きました。

専任主事は、県教委社会教育課に配置されましたが、実質的には学校教育における同和教育の指導・助言も行うなど、福祉教員たちの大きな力となりました。

しかし、この時点では学校社会教育を通して、指導者自身でも部落問題に対する知識や理解も極めて不十分であり、今日のような同和教育は行われていませんでした。

部落差別は深れた大人たちの意識の中にある偏見、誤解がそのまま児童・生徒に伝えられるので、まず社会教育を徹底して、成人の差別観念を払拭する必要があると考えられていました。このため、学校教育に浸透するまでには到りませんでした。